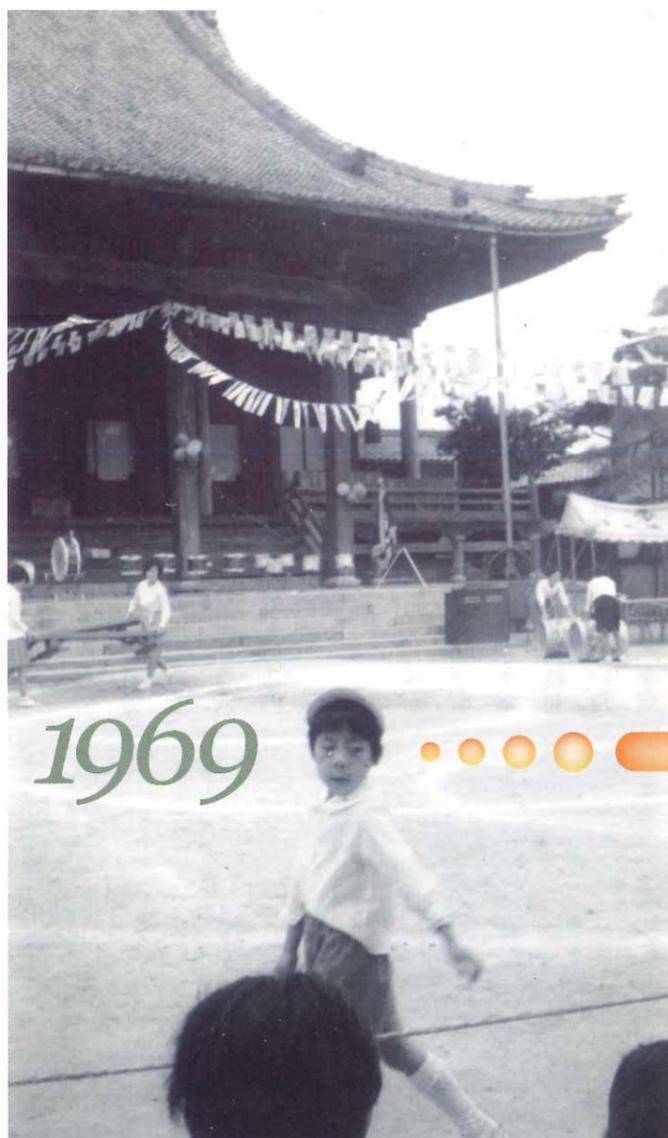


# 岐阜同朋

# ぎふどうぼう

- 本堂なき別院 — 笠松別院ものがたり —
- 教如上人御旧跡探訪記② ● コラムしょうしんげ
- 美濃門徒の昔話 教如上人自画像と五日講
- 一枚の寫眞の記憶 — のすたるじっく・ふおと —

# 2013.10 111



1969

笠松別院 いまむかし



2013

羽島郡笠松町西宮町

## 一枚の寫眞の記憶

— のすたるじっく・ふおと —



巻頭ページでお話いただいた奥田豊子先生は、後列左から4人目です。

明年(2014年)は、いよいよ「岐阜教区宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要」が厳修される。この

たびの御遠忌法要は、岐阜、笠松、竹鼻の3別院を拠点として、おそらく教区としては初めての試み

で行われる法要である。中には、3別院を巡回して参拝される、熱心なご門徒さんもおられるだろうが、その際には、ぜひ本堂以外の建物もくまなく見て回ってほしい(笠松には本堂すらないのだが……)。輪番はじめ別院関係者の、別院維持のご苦

労の跡が見てとれるはずである。先号編集後記で紹介した、本山出版部発刊の『別院探訪』では、美麗句でもって各別院を紹介しているのだが、熟読すれば瀕死に喘いでいる別院が、全国にいくつもあるの

がよく分かる。

本山は相変わらず、地元(崇敬区域)に丸投げ体制を崩す様子はないが、そろそろ何らかの指針(統廃合を含め)を示すべきだと思ふのだが、いかがだろうか? また、本山が知らん顔をするのなら、この御遠忌を機縁にして、教区全体で「別院問題」として語る場ができないものだろうか?。

写真は1968(昭和43)年頃の笠松保育園の園児たち。背後は1974(昭和49)年4月に全焼してしまつた笠松別院本堂。

この本堂の薨を一体、何人の園児が仰ぎ見ることができたのだろうか……? 明年(2014年)は、教区御遠忌厳修の年でもあるが、「笠松別院本堂炎上焼失40年目」の年でもある。

### 編集後記

今年(2013年)は例年より早く5月28日頃には梅雨入りが発表されましたが、雨もろくに降らずに、7月8日頃には例年より一週間も早く梅雨明け宣言が出されました。

梅雨明けしたと思つたら、日本各地では局地的なゲリラ豪雨、突風、竜巻にみまわれました。その一方、東海地方は雨が降らず35度以上の猛暑日が続き水不足にもなりました。今年の天候は、我々人間に「気づけよ」と言っている様な気がしました。

我々人間が自然を壊し、やりたい放題やってきた事を反省し、自然を自然に戻す事を考えていかなければならないと思ひました。そう考えると、やはり人間は、大自然(天候)にお任せするしか無いのです。

それは、我々人間の命と同じではないでしょうか? 人によって生きたり、死んだり自由にする事の出来ない命です。「生きとし生ける」いのちを実感させられる、今年の天候でした。(大橋)

岐阜教区 宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要 2014年4月26日(土)~29日(火・祝)

発行: 岐阜教区教化委員会 真宗大谷派岐阜教務所 橋 秀憲 〒500-8054 岐阜市大門町1 TEL.058-266-1378 編集: 岐阜同朋編集委員会

本誌に関するご意見・ご感想をお待ちしております。

# 本堂なき別院

—笠松別院ものがたり—



本堂跡基壇。面積は大幅に縮小されている。

岐阜教区には、岐阜・笠松・竹鼻の3つの別院がある。その1つ笠松別院には、本堂がない事をご存知であろうか。1974(昭和49)年春、火災により本堂が焼失したのである。前年秋、本堂が修復され、御遠忌が厳修され、明けた年の事であった。

それ以来、本堂の再建はなされず、今は、延焼を免れた山門・経堂・鐘楼・庫裡、御殿と呼ばれる座敷のみがたらずんでいる。本堂なきあと御本尊は、仮本堂とされる御殿に安置されているが、須彌壇も宮殿もなく、ベニヤ板で作られた台の上に鎮座されている。その本尊前の畳間は、白アリの害によるのか、多勢で歩くのがはばかれるような状態である。庫裡には、昔ながらの広い台所、おとき場の他、数多くの部屋があるが、使われる部屋は一部であとは近年手が入れられていないため、傷みがひどく使用できない状態である。

修復の見込みもなされていないこのような状態であっても、輪番

や関係者はそれでも何とかして守ろうとされている。その御苦勞には、なみなみならぬものがある。このような別院の現状を知る人が、教区にははたして何人いるのであろうか。

別院境内には、笠松保育園が併設されている。1948(昭和23)年に開園された保育園は、本堂と密着していたと、1964(昭和39)年から保育士をされていた奥田豊子先生は語られる。「本堂の広縁はいつも園児たちのあそび場でした。子ども報恩講も本堂で行ったんだけど、寒くてね(笑)。でも本堂でやったことは、心に大



1970(昭和45)年頃の花まつり

きく残っています。花まつりの時は、白い象を本堂から出して町中を引いて歩いたものです。でもその象も本堂と一緒に焼けてしまつてからは、象をまた作る話もなくて」と。

さらに「火事があったのは4月3日深夜でした。夜中に電話がかかつてきて、「本堂が燃えている」という知らせにびっくりして車でとんでいった。その時目にしたのは、本堂は焼け落ち、まるで大きな大きな火のようになり赤々と燃えていた。あの時の光景



別院資料より

は、今でも目に焼きついている……。」と。

本堂が焼けて、その後始末がなされたあともそこには灰が残っていたそうである。

先輩の先生は、「園児たちに、『その灰の上には乗つてはいけない。灰の上を歩いてはいけない。』と思

わず叫んでおられました。でも、敷地内の灰を見ては、とても中に入れな



奥田豊子先生近影

かった。何かもつたいないという気持ちがあつて。」と当時の様子思い起こされていた。

火災にあったのは本堂のみで、保育園の園舎には類焼もなく、数日後には入園式が行なわれた。本堂焼失後は、本堂で行っていた行事は全て保育園の遊戯室で行われるようになったのだが、「残念だと思った。本堂があれば」と、よく思った。本堂がある頃は、



1965(昭和40)年頃

現在(2013年)

現在境内東側にある経堂が、かつては反対の西側(現在園舎のある側)にあった。



1970(昭和45)年頃

かつての園舎には太鼓楼があって、町内に時を知らせていた。

「お寺の保育園」にきているという事を伝えることができていたが、焼けてからは、「お寺の保育園」という事が伝えにくくなつた」とも。

今では保育士という職から退かされている奥田先生だが、「本堂があつたらよかつた」と今でも思っている」と、静かでありながらもはつきりとした口調で発せられた。

青々と繁らせ、雑草におおわれた本堂跡(基壇)を見おろしながら立つている。その木を見ながら傍らに建つ、老朽化が進む御殿と庫裡を目にすると、別院とは何なのか、何のためにあるものなのか、問われる事が表に出ないまま、40年の月日が流れようとしている。



仮本堂、内部。須彌壇、前卓などはベニヤ製。

## 笠松別院の本堂全焼

【羽島】三年前(昭和49)年、岐阜同寺は明治二十四年の濃尾震災以降、岐阜市から消防車十八台が出動、消火に当たったため民家への類焼は免れた。なおこの火災で同別院の駐車場に止めてあった乗用車、小型トラック三台のフロントガラスが割れた。原因や被害額は調査中。

1974(昭和49)年4月3日 中日新聞夕刊

# 教如上人御旧跡探訪記②

羽島・安八編



秀吉の死後、豊臣家に変わって天下を取ろうとする徳川家康に接近する教如上人の動きは石田三成にとつて「家康の内通者」として看過することができませんでした。特に教如上人が関東へ下向し、下野国小山（栃木県小山市）で家康と会見して上方における石田三成方の蜂起の情勢を知らせ、陣中見舞いとして軍資金を進上し終えた後、京都への帰路は命懸けのものとなりました。

1600（慶長5）年8月、関ヶ原の決戦直前のこの美濃で石田三成方が上人を待ち構えるなか、最難関の美濃を通過するため頼られた羽島市の西方寺と西軍石田方に襲撃され辞世の歌を詠むほどの危機に遭遇した森部の光顕寺を紹介します。

この寺の開基の歴史は、推古天皇時代に遡るとされます。612（推古20）年には、聖徳太子が山背大兄王の王子懐胎の時、安産祈誓のため七堂伽藍を建立し太子寺と名付けて自刻の阿弥陀如来（槍傷の阿弥陀如来）を安置したと伝えられています。



## 西方寺

あじかちようすくみち 羽島市足近町直道

また、皇極天皇が本多義光に命じ善光寺如来を模して納めたとされる尊像（裏銘に仍皇極天皇勅発卯六月本多善光奉写尊像とあり）も伝来しています。

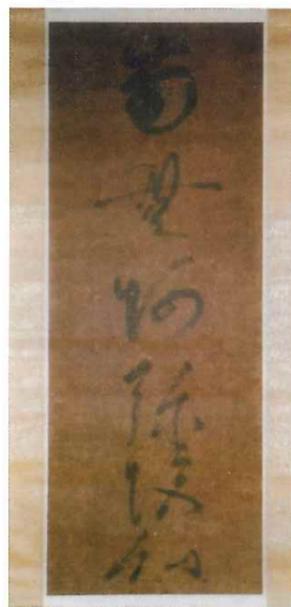
811（弘仁2）年、伝教大師・最澄が当寺に止宿されたのが縁で817（弘仁8）年に天台宗に改宗され、1232（貞永元年）より寺田山西方寺と称しました。

1235（嘉貞元年）親鸞聖人が関東より帰洛の途中、当地に逗留し教化された時、当寺の渋谷祐俊が聖人に帰依し浄土真宗に改宗しました。祐俊は親鸞聖人より西円の名を賜り寿像（存命中の肖像画）を授けられました。



▲教如上人感状「泪の御書」(西方寺蔵)

▲教如上人六字名号(西方寺蔵)



徹底抗戦を続けた西方寺祐慶は、上人にとって最も信頼できる人物のひとりでした。西方寺祐慶を頼って来た上人を、あらゆる手立てを使って帰洛させようとしています。そして、(当時の史料が現存していませんので、推測となりますが)上人を当時境内の直ぐ裏を流れていた木曾川を使って西へと向かわせることとなります。

## 光顕寺

安八郡安八町森部



▲須弥壇引戸(教如上人辞世歌)(光顕寺蔵)

散らせしと森部の里に埋めばや  
かげはむかしのままの江の月 教如

像を刺したところ血がほとばしりてたと伝えられています。(この像は「槍傷の阿弥陀如来」と呼ばれ、かつては秘仏として、毎年2月22日の太子会に公開されていましたが、現在太子会は厳修されておらず、お寺に所蔵されています)。弥八郎は、このあと大変後悔し、信長に決死の覚悟で「寺を建立し、戦でなくなった敵味方を共に供養したい」と願い出て、岐阜城から見えないうちの許を受け、僧侶となり今の柳ヶ瀬の地に堂宇を建立したとされます。これが「弥八地藏」です。

信長に寝返る寺が出る中、その後も教如上人に従い命懸けで

徹底抗戦を続けた西方寺祐慶は、上人にとって最も信頼できる人物のひとりでした。西方寺祐慶を頼って来た上人を、あらゆる手立てを使って帰洛させようとしています。そして、(当時の史料が現存していませんので、推測となりますが)上人を当時境内の直ぐ裏を流れていた木曾川を使って西へと向かわせることとなります。

東本願寺を創立された上人は、自身の寿像や自筆の六字名号の外、教如上人「泪の御書」といわれる感状を下付したことが窺えます。



▲教如上人寿像(西方寺蔵)

1600（慶長5）年8月10日朝方、西方寺を後にした教如上人は、西軍石田三成方にかぎつけられ、墨俣で昼に襲撃されます。やつとの思いで長良川を渡って安八町森部の光顕寺に避難されました。そこでも石田軍兵の襲撃を受けました。上人は本堂の須弥壇の下に隠れて「もはやこれまで」と思われ、筆も紙もないため引戸の板をはずし辞世の和歌を短刀で刻まれました。上人の危機を伝え聞いた森部村、大森村など近隣の15カ村、20カ寺の門徒が鋤、鍬、鎌などを手に駆けつけ危ういところを助け出し、護衛し



▲教如上人寿像(光顕寺蔵)

京都へ向けて出発しました。(この門徒の組織は、後に「土手組」と呼ばれました。)

上人はこの寺で九死に一生を得た後、大垣方面へ向かい8月14日昼、草道島の西圓寺で身を隠し、夜「鉦ヶ岩屋」で野宿し伊吹山北部を越えて、15日近江に

入り琵琶湖を利用し、17日無事京都へ帰り着いたといわれています。(以上の記述は、小泉義博氏の説によっています。)



▲光願寺

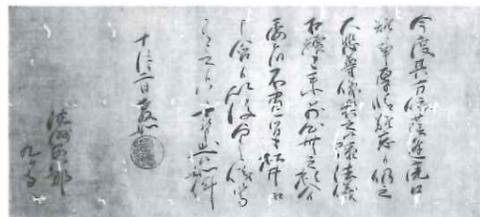
光願寺では、教如上人が辞世歌を刻まれた須弥壇引戸と教如上人より下付された寿像を今でも大切に保管しています。

＊教如上人(1558~1614)  
戦国乱世に第11代頭如上人の長男として生まれ、1592(文禄元)年に第12代を継承するも、豊臣秀吉の命によって退隠を余儀なくされる。その後、徳川家康から京都烏丸の地に(現、真宗本廟の地)寄進を受け、東本願寺を創設された。

- 【参考文献】
- 「教如上人」上場顕雄著 東本願寺出版部
- 「西方寺誌」 西方寺
- 「土手組と教如」 ハートピア安八
- 「羽島市地名物語」 羽島市

# 土手組

1605(慶長10)年秋、上人は遭難時の働きに大変感謝し、安八、墨俣、祖父江、茶屋新田、日置江の20カ寺の門徒に土手組の呼称と本山直参のお墨付きを与えました。それ以来、土手組の組合は、毎月10日に「十日講」を、20カ寺で年一回「報徳会」の法要を勤めています。



▲教如上人書状「御墨付」(報徳会蔵)  
「難を逃れた際の厚情を忘れない。大悲尊像を贈る。望みがあれば、家臣の松井に申し出よ」などと書かれている。

## 美濃門徒の昔話

# 教如上人自画像と五日講

天下分け目の関ヶ原の戦いで、東軍の徳川方に味方した教如上人は、関東で徳川家康とお会いになられた帰りに、美濃付近で、西軍の石田三成、小西行長らにとらえられようとしていました。迫り来る追っ手を、この地方の真宗の僧侶や門徒は力を合わせて上人をお守りしました。中でも特に、春日村の僧侶や門徒は自分たちの身を投げ捨て、上人をお守りしたので、上人は、そのことに大変感謝し、その礼として、自ら自画像を描かれ、形見として春日村八カ寺の僧侶一同へお渡しになりました。

受け取った春日村の人々は大いに喜び、その御影を表装するために、本山の表装所に依頼しました。

本山の表具師は、貴重な御影をあのような山間部においておくのは惜しいとして、御形と少しもたがわぬ写影二十幅を新たに作成し、そして、春日村より訪れ

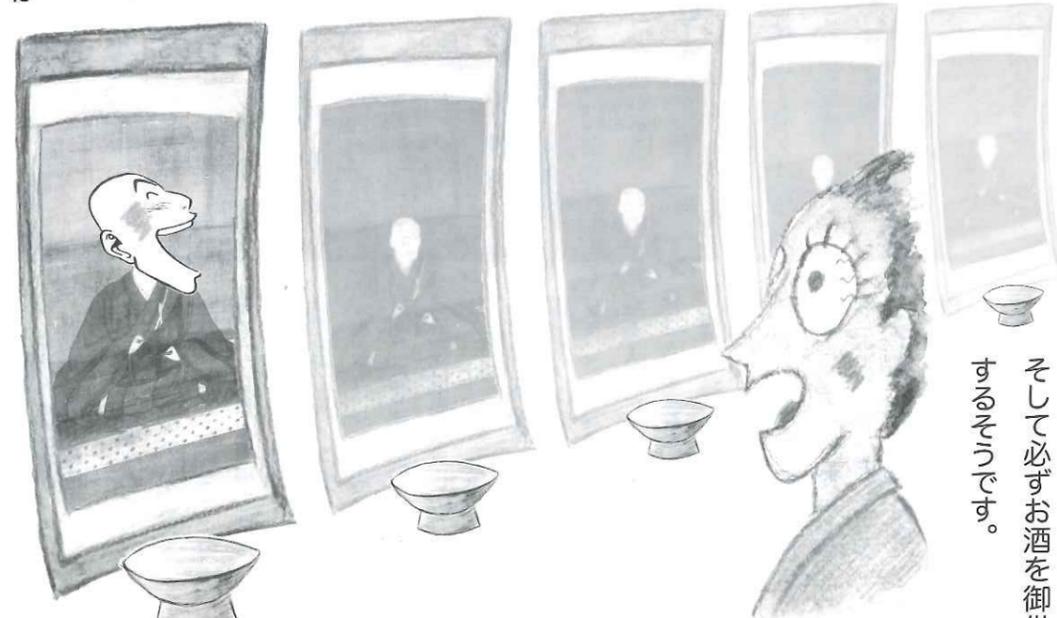
た人々に、二十幅の御影を並べ、この中より、ご真影の一幅を持ち帰れ」と、無理難題を示しました。

訪れた村の人々は、その難題に大変困ってしまいました。どの御影もすばらしく、どれがご真影か判断できぬほどのできばえだったのです。

そこで考えた人々は、上人は大変にお酒が好きでいらしたので、全部の御影にお酒を御供えしてみることにしました。

すると、どうでしょう。二十一幅の中で、一幅のご真影のお顔だけが、「ほっと」赤く染まったのです。村の人たちは大いに喜んで、そのご真影を持ち帰ったと伝えられています。

ご真影は、現在村の八カ寺が



【参考文献】『教如流転』 宮部一三著  
『春日のむかし話』 春日村教育委員会編集発行

五濁悪時群生海 応信如来如実言  
濁った世界 悪い時代に生き 苦しみの海におぼれているのちあるものは  
私のまことの言葉を信じるべきなのです

## しょうしんげ

五濁とは五つの濁りという意味であり、阿弥陀経には「劫濁」「見濁」「煩惱濁」「衆生濁」「命濁」と説かれています。

その「劫濁」とは、時代が汚れていること、天災や戦争などで世の中が混乱していることを表しています。

2011年に起きた東日本大震災。この地震・津波では多くの方がお亡くなりになり、今まで見たこともない様子が報道されるたびに、改めて恐ろしさを感じました。又、この地震によって、原子力発電所の事故も起きてしまいました。目には見えない放射線物質(別名・死の灰)によって、住み慣れた土地から避難するこ

とになってしまった人々。未だ解決出来ない放射能汚染。死の灰は、私たちにこれからどんな影響を与えるのか不安と恐怖が募ります。まさに、今は劫濁の世界。しかし、私たち命あるものは、どんな状況であつても生きていくのです。

親鸞聖人は、如来が説かれた真実のみ教えを信ずべきと言われています。



交代でお守りしているそうです。また、教如上人の命日のお勤めである五日講は、四百年間、人々によって大切に受け継がれてきています。

そして必ずお酒を御供えするそうです。